

# ホワイトメモリー

みやの早紀

その絵を見た瞬間に、柊一の心はとりこになってしまった。空気が透明感を増した十一月のある日、市民美術展でのことだった。

ああ、こんな風に絵を描くことができるんだ

高校の美術部員の彼にとっては新鮮な驚きであった。それは、五十号くらいのキャンバスに油彩で描かれている。

白い艶のある布を掛けたテーブル、その上に置かれた、冷たい光を見せる白い磁器の花瓶、籐籠に盛られた玉子など、ほとんど白に近い色ばかりの静物画は、素材の質感の違いを見事に描き出し、背景の薄いベージュ色によく調和していた。アクセントとして花瓶の前に置かれた深い青色の布は、ハンカチのように四角く折り畳まれ、絹のしなやかな光沢を見せている。

それぞれの物が、その内側から柔らかな光を放っているかのように全体が気品に満ちていた。

白い物ばかりをこんなに見事に描き分けられるとは……

『白のハーモニー』という題の付けられたこの作品の画家の名前は、「結城一夫」となっている。いったいどういう人物なのだろうか。会ったこともないそのひとのことを想像してみた。

その夜は昏間の心地よい興奮が納まらず、なかなか寝つけなかった。翌日も白い絵が何度も頭の中に浮かんでくる。

もう一度あの絵を見たくて展覧会の最終日に行ってみた。落ち着いて見てみるとやはり何か似ている。家にある、母の若い頃の肖像画と、雰囲気やタッチに共通性がある

と、感じないではられない。

柊一が三歳の時に父は亡くなった、と聞かされているが、父親を知る手掛かりになるも

のは家に何もなかった。ただ、結婚前の母の肖像画だけが、目には見えない父の存在をわずかに感じさせてくれるような気がしている。その絵に惹かれる気持ちだが、柊一に絵を描かせているのかもしれない。

デニムのジャケットを着、ジーンズのパンツ姿の彼は、細身でまだ顔に子供っぽさが残っている。いつまでもそこに立ちつくしていると背後から落ち着いた男の声がした。

「その絵をお好きですか？」

振り向くと背丈が柊一と同じくらいに高く、骨張って四角い顔の四十歳位の男性が、白いシャツにベージュ色のニットのジャケットを羽織って、穏やかな顔を見せて立っていた。

柊一は、この絵に惹かれて忘れられないのだ、と素直に返事をした。

「作品を気に入ってくださってありがとうございます。これを描いた結城です。」白「は私にとって大切な色なのですよ」

画家は、少し微笑みながら絵に目をやった。柊一は、想像してもわからなかった作者を目の前にして、やや興奮していた。

「山野柊一です。絵は、描くのも見るのも好きですけどこのような白い絵には、はじめて出会いました」

「山野君、ですか」

結城の目が柊一を見つめた。しかし、すぐに視線をはずすと、抱えていたこげ茶色のセカンドバッグからはがきを取り出した。

「もし、よかったら、来月に開く私の個展を見に来ていただけませんか」

案内状を渡すと、軽く頭を下げて立ち去った。柊一は、肩幅の広い結城の後姿をぼんやりと見送って立ち尽くしていた。

木々の紅葉も盛りを過ぎ、葉が落ちてむきだし枝が目立ち始め、十二月がやってきた。

柊一は気に入った絵にまた、出えるかもしれないと心を弾ませていた。私鉄に乗り三つ目の駅を降りると、目の前にタクシーやバスのための円形の地帯が広がっている。それに沿ってぐるりと回って行くと、駅に向き合ったところに、四階建ての少し古びた小さなビルがあった。一階に画廊の看板がかかっている。どうやらそこらしい。

ガラスのドアを押して入ると、中年の女性一人が誰かに挨拶をして出てくるところだった。入れ違いに入ると会場はこじんまりとしていて、二十点くらいの絵が飾られているの

が、一目で見取れる。

「やあ、来てくれましたね」

ダークグリーンのゆったりしたセーターにグレイのスボン姿の結城が迎えてくれた。まだ青年のような雰囲気を残した笑顔をみせている。

柔らかな間接照明の中に飾られている絵は、落ち着いた色調の静物画が多い。その中で一枚の人物画が目を惹いた。『ベンチの恋人達』と題の付けられたその絵は、百号くらい大きな作品だった。夏の終わりのようなやや疲れた濃い緑の公園の芝生と、まばらな木立を背景にして白いワンピース姿の若い女性が、うつむき加減にベンチに腰掛けている。そのとなりには紺色のデニムのジャケットとジーンパンの青年が、話しかけるような感じで女性の方を向き、斜めに座っている。

「あっ」

柊一は小さく声を上げた。

この女性は、顔をはっきりとは見せていないが、母の肖像画によく似ている。それどころか、背景も服装もベンチも同じで、違つのは隣に座っている青年がいることだけである。その青年は浅黒い顔色で手足が長い。

一枚の絵にとらわれている様子を、結城は不思議そうに眺めた。

柊一は頭が混乱しそうで、喉がからからになってきたが思い切って聞いてみることにした。

「この青年は結城さん自身ではありませんか？」

「そうですよ。分かりますか」

「では、この女の人は？」

「このひとは、私の思い出の中だけに住んでいる人です」

思い出？ 初恋の人かな。結城さんは、今も忘れられないのだろうか。その女性も、結城さんのことを思い出の中に閉じこめているだろうか

柊一は頭の中を駆けめぐる想像を、無責任に言葉にするわけにもいかないので、黙り込んでしまった。結城が、いぶかしげでやや心配そうな視線で見守っている。

心の中の整理ができないでいる柊一は、絵の下の隅にある「K・Y」と黒色で小さく書き込まれた画家のサインを目にとめた。書き方の癖が、母の肖像画の物と同じであることにハッ、と気がついた。思わず柚木の顔を見たが、何を言えいいのか言葉が見つからなかった。

黙って様子を見ていた結城が、名詞を取り出した。

「今度の日曜日、私の家に来ませんか。ほかにもお見せしたい絵があるから」

「ええ、是非」

考えないうちにそういう言葉が出ていた。挨拶もそこそこに一礼すると、ぼうつとして画廊を後にした。

母さんに聞いてみよう。もしかしたら、結城さんを知っているかもしれない。友達だったかも。他人の空似、ということもあるけど

柊一は呆然と歩き続けた。

次の日曜日。柊一の家から電車で二十分、駅から十分程歩いた住宅地の中に結城の家はある。チャイムを鳴らすと、庭のほうへ回るように、とインターホンで返事があった。この画家の仕事場は、八畳ばかりの洋間に庭から直接入れるようになっていた。

「やあ、来たね」

ガラス戸を開けて顔を出した結城が招いた。柊一は、アトリエを珍しそうに見回しながら部屋にあがった。雑然と至る所に立てかけてある絵は、気持ちの安らぐような風景や静物画が多かった。

柊一に椅子を勧めてから一枚の人物画を取り出し、前に置くと自分も椅子を近くに持ってきて座った。

「どう、この人」

白いワンピースの若い女性が、木の椅子に腰掛けて斜めに顔を向けている。このあいだ画廊で見た絵の女性だろうか。なんだか懐かしいような、よく知っている人に出会ったような感じがした。結城は、絵に目をやりながら、もっと遠くを見ているようなまなざしで言った。

「私の初恋の人だよ」

立ちあがると、次にもう一枚、白いYシャツの少年の絵を出してきた。

長い手足や「ちんちん」を見ているくらいとした丸い目付きが結城に似ていた。

「これは私の若いころの自画像なんだ」

なぜなんだろう、自分がこの部屋にも、この人の描いた絵にもすっとなじめてしまうのは。きっと、この人の色調が僕の好みにあっているからなんだろう

はじめてきた家なのに、前から知っていたように気分が落ちついた。柊一は訊いてみた。

「この絵を描いたあと後、この女の人はどうなったんですか？」

「私とこの人は、お互いにいつか結婚したいと思っていましたよ」

「でも、そうはいかなかったということですか」

「やむをえない事情があつてね、あきらめなければならなかったんだ」

「じゃあ、そのあと結城さんは、誰か他の人と結婚されたんですね」

「いや、ずっと一人だ。絵の勉強のために永く外国に行っていたからね。でも、この人と結婚できて、子どもがいたりしたらいいなと、なんとなく思っていた」

柊一は、ふと自分の父のことを考えていた。

ずっと昔に亡くなった、と母には聞かされていた。しかし……

「君を見ていると何だか私の若い頃を見ているような気がしてね、つい思い出話をしてしまった。この絵の二人はお似合いだろう？」

柊一はおそるおそる尋ねてみた。

「この人の名前は？」

結城は考えるような様子になったが

「それは、絵の中に閉じこめておこうよ。思い出はそつと大切にしておきたいからね」

訊いてみたいことがいっぱいあるような気がしたが、これ以上踏み込むと、まだ、幻のようになえ思えるこのアトリエも、何もかも消えてしまいそうに思えて、喉元まで出かけた母の名前を飲みこんだ。

僕の父はどんな人なんだろうか？ 柊一は自分の父親については、ほとんど何も知らないことに気付き今更ながら驚いている。

同居している祖母も、母も、父については、柊一が三歳の時に亡くなった、としか教えてくれない。去年、亡くなった祖父も生前、父の話になるとむっつりと黙り込んでしまつので、聞いてはいけないことのような気がして、柊一は自分から父の話を持ち出すことをしなくなっていた。

今日、画家の結城に会って、彼が若いときに描いた自画像と、若い女性の肖像画の二枚を見せられてから、頭の中はそのことで一杯だった。そして、自分の母親の娘時代のことを、そして父親のことを聞いてみたい衝動が渦巻いているのを、押さえることができない

でいた。

あの絵の中の白い洋服の女性は、若い頃の母親ではないだろうか

そう思う思いが、消しても消しても湧き上がってくる。しかし、今の母は無造作なショートカットの髪で、よく働く主婦としか見えない。

夕食後、台所のかたづけを終えた母の知美が、お茶の用意をして、居間でテレビを見ている祖母と柗一の所へ来た。

「僕にもお茶入れてくれない」

「あら、珍しく仲間入り？」

「うん、ちよっとね」

ほづじ茶の香ばしい香りを囲むようにして三人は低いテーブルの周りのソファアに深く腰掛けた。知美はみんなにお茶を配り終え、くつろいで満足そうに湯気の立ちのぼる湯飲みを口元へ運んだ。

「母さん、少し聞いてもいいかな」

「なあに？」

「ずっと前から一度ちゃんと聞いておきたいと思っていただけ、父さんでどんな人だったの？ 死んだっていろいろの本当なの？ うちには写真も飾ってないじゃない。僕は、もう子供じゃないんだから、はつきり教えてくれないかな」

知美は突然の質問に驚きながら、柗一の顔をじつと見つめて

なぜ、急に聞く気になったのさ

と、その真意を推し測るように黙り込んだ。そして、柗一の祖母で、自分の母親である志津が心配そうに見守っているのと顔を見合わせると、少し考える風だったが、つと、顔上げた。

「実はね、亡くなったと言っていたのは、嘘だったのよ。ごめんね。夫婦仲が悪くてどうにもならなくなったから、柗一が三歳の時に離婚したのよ。その後、柗一に会いに来てくれることもなかったし、一年あまり経った頃『再婚しました』って八ガキが来たきり、連絡も途絶えていたから、柗一にはお父さんのことは何も話さないでおこうって、親は私人なのだって決心したの」

「でも結婚したときは愛し合っていたんでしょ。僕は両親に愛されて生まれてきたんじゃないの？」

「亡くなったお爺ちゃんがお父さんのことを、堅い勤め人だからって気に入って、無理に

結婚させたのよ。はじめは上手くいったんだけど、柗一が生まれて母さんが育児に夢中になっていくうちに、お父さんの気持ちはずっと遠くに行ってしまったの。お母さんが悪かったのよ。柗一を父親のいない子供にしてしまって、すまないことをしたと思っているわ。本当にごめんなさい」

母の話を聞いても、父親の像というものが見えてこなかったが、自分が父親に愛されていなかったことだけが胸に冷たく残った。

そのせいかふと、結城のことを訊いてみたい衝動に駆られた。

「母さん、娘時代に絵のモデルになったことなかった？」

「えっ、それは……」

母が言葉を濁した時、祖母が口を挟んだ。

「そんなもんある訳ないだろう。あんなのことは、お爺ちゃんもお婆ちゃんも、とても可愛く大切に思ってたんだから、もう、それでいいでしょう」

口頃は穏やかな祖母の、いつになく強い口調にそれ以上訊くことができなかった。

数日後、知美の学生時代の友人の圭子が訪ねてきた。

「ねえ、あなた知ってる？ 結城さんが展覧会に絵を出品してたわよ。なかなかのものだから。いつ日本へ帰ってきたのかしらね」

テーブルへ置きかけた紅茶のソーサーを持つ知美の手がびくつとふるえ、カップがかたかと小さく音を立てた。

「まあ、知らなかったわね。立派な絵描きさんになられたかしら。フランスに留学されたのは十何年も前のことでしょう」

と、知美は動悸の高鳴りを悟られないように、さりげなく答えて紅茶を圭子に勧めた。

「ね、あのころの写真を見せてくれない？ 学生時代が懐かしくなっちゃった」

「まあ、しょうがないわね」

知美がアルバムを持って居間に戻ったところへ、柗一が学校から帰ってきた。

「あ、こんにちは、いらっしやい」

「まあ、柗一くん、大きくなったわね。ちょっといらっしやいよ」

小さなころから可愛がってくれた圭子の言葉に、柗一は傍のソファに腰掛けた。アルバムをばらばらめくっていた圭子が何かを見つけたようだ。

「ほらほら、柊一君も見てくらん。お母さんの青春時代の写真よ」

急に目を輝かせて一枚の写真を指差している。

「これが、お母さんよ。若いわね。そして隣に並んで立っている人、これが結城さん。なかなか格好いいでしょ。でも知らないわよね」

「えっ、結城さん？」

柊一は まさか と思いつつアルバムをのぞき込んだ。あの自画像の少年とよく似ている。母はあの絵の中の白いワンピースの少女と服装も長い髪のもも、雰囲気もそっくりだった。

「お母さんと結城さんは仲がよくてね、噂のカップルだったのよ。卒業したら結婚するだろうと思っていたのに、柊一君のおじいさんが大反対をして、二人の仲を引き裂いたの。」

『絵描きになるうなどと夢のようなことを考えているものに、娘は渡せん。どうやって生活する気だ』ってね

柊一は声も出せずに圭子の顔を見つめた。

「よしてよ」

知美がさえぎったが、圭子はかまわず続ける。

「二人とも学生だから、親の反対を押し切ってまで結婚する勇気がなかったのね。それで失望した結城さんは、一人前の画家になると言って、わずかのお金だけもってフランスへ勉強に行ったの。でも連絡がぜんぜんなかった。知美さんは結城さんの実家に電話をしてパリの住所を教えてもらおうとしたけれど、彼のお母さんが『一人前の画家になれるかどうか。何年で帰ってくるかわからないのですから、あの子のことは忘れてあなたの道を見つけてください。』そう言って突き放したの。それですっかり絶望して、親の勧める結婚をってしまったというわけ」

やはり、あの絵の女性は、母だったのだ。想像はしていたが、胸がドキドキと高鳴り、頭がカーッと熱かった。

年が変わって冬の寒さも緩みかけたころ、柊一は、戸籍上の父親である溝口に思いきって会うことにした。

この前、母に、自分の父親のことを訊ねて以来、頭の中で疑問がどんどん膨らんでいくのをひびくこともできないでいた。



自分は誰の子なんだろう。戸籍上の父が本当の父だろうか。母と離婚後、他の人と再婚したとしても、子供のことをまるで気に掛けていないのは、なぜだろう。もし、実の親子ではなかったとしたら……。

もう一度母に訊いてみるつもりではあったが、その前に会って見ようと思いついたのだ。洗る母から父の勤め先を聞き出し、会社に電話を掛けた。昔、捨てた息子からの突然の連絡におどろき、当惑しながらも溝口はともかく会う約束をしてくれた。

指定された喫茶店に着いたときには、もう、日が暮れて暗かった。家路を急ぐ人の流れの中を溝口は、地味なスーツにベージュのややくたびれたダスターコートを羽織ってせかせかとやって来た。柊一の幼い頃しか知らない彼は、目の前の若者があまりに大きいので、

ほう

というような顔をしながら、前の席に座った。それほど懐かしそうでもなく、コーヒーを二人分注文すると気ぜわしく話しはじめる。

「今、いくつ？ 十六かな」

何の話かと、やや不安そうに眉をよせ、せっかちに切り出した。

「そろそろ将来の進路を考えるときだよな。ところで急に会いに来たのには何か訳があるの？」

「僕はそろそろ自分のことをちゃんと知っておきたいのです。あなたは、ずっと母や僕と連絡を取らなかったでしょ？」

「こちらにも家庭があるからね」

そっけなく言う。

「父親は死んだのだと、ずっと思いこまされていたのですよ。たとえ再婚していても自分の子供なら、どこで、どうしているか気がかりなものでしょう。貴方は僕の成長をまるで気にも掛けていない。そして僕は、貴方のことを何も知らない。これはどういふことなんだろう、何か訳があるのかな、と思っても不思議はないでしょう。母に訊いても、ちゃんと答えてはくれないから今日伺いに来たのです」

柊一は心の中にくすぶっていた疑問を次々に投げかけた。しかし、もっとも訊いてみた

い 貴方は、本当に僕の父親なんですか

と、という言葉はさすがに言い出せないでいた。黙って話を聞いていた溝口は、しばらく考

えるように窓の外に視線を投げかけていたが、自分の膝にのせた右手の指が、無意識にぴくぴくと動いて足を小刻みに打っている。

やっと運ばれてきたコーヒーを一口すすって気を取り直すと

「それは君の母さんに訊いて見るんだね、私からは何も言うことはないよ。ま、元気でしつかりやってください」

これいよいよ柊一にかかわっていたくないというように、伝票を持ってそそくさと席を立って行った。

あれが父親のとの態度だろうか、たった三年しか一緒に生活してはいないとはいえ、また、今は別の家族がいるということを考えても、親子らしい感情がほとんど感じられないではないか

気持ちを切り捨てられたようで、力なく座りつづけていた。

その後、柊一は、高校の美術部でただ、描くことに没頭した。物の内に秘められた生命力を表現できないか、と心を砕きながらも、結城の描く白い静物から受けた衝撃を忘れられないでいた。

その年、十二月に入ってから開催された市の美術展で、柊一の油絵が新人賞を受けた。籠に盛られた葡萄の大きな房や梨を描いたその油絵は、写実的で、もし、その艶やかな果物にナイフを当てると、甘い汁がスーッと流れて、白いテーブルクロスをぬらしそうにみずみずしく見える。

母の知美が是非見たいというので、日曜日の午後、柊一も一緒に出かけたが、バスに乗っているときも、会場への長い階段を上がっているときも

今日こそ、母に本当のことを話してもらおう

と、考えつづけていた。

「これがそうなのね」

柊一の絵の前に来ると、知美は、食い入るようにじっと見つめていたが、やがて涙がじわっと浮かんできた。

受賞したことも嬉しかったが、内心

あの人の絵とタッチが似ている

と心がふるえていた。

柊一が溝口の連絡先を知りたがったときから  
もう、真実を話してやらなければいけないだろう  
と覚悟を決めている。

会場を出ると外の庭園では、広葉樹が葉を落とし細い枝ばかりが目立つ。それまでは気にもとめていなかったヒバや山茶花などの常緑樹が、風でさわさわと揺れて、落ち着いた存在感を示し始めていた。

ベンチに並んで腰掛けたが、遅い午後の日差しは弱まり、急に冷え込んで来たように感じる。

柊一は思いきって訊いてみることにした。

「母さん、溝口さんは、僕の父親じゃあないでしょう？」

知美は表情を変えない。

「会ったのね。あの人なんて言ってた？」

「何も教えてくれないよ。母さんに聞けって。それって、つまり、父親ではないって言うてるのと同じでしょ。」

ずっと胸に重くつかえていたものを、やっと吐き出した、というように深い息をして母親の横顔を見やった。

知美はしばらく黙り込んでいた。それからぼつりと言った。

「あなたが感じているとおりよ。溝口さんはあなたの実の父親ではないの。今まで隠していてごめんなさい。いつかは話さなければ、と思っていたのだけれど……」

「じゃあ、本当のお父さんは誰なの？」

「それは……、このあいだ写真で見た人。結城さんよ。」

「やっぱり、そうだったのだ。推測はしていたけれどはっきり母から言われると、ショックだった。」

「あのとき、圭子から話を聞いたでしょ。結婚できなかったわけも、そのとおりよ。知美は平静さを保とうとして、手に持ったハンカチーフをくるくると巻いたり戻したりしている。柊一は訊きにくいこともこの際全部聞いてしまおうとひざに置いたこぶしをしっかりと握った。

「その頃、もう僕がお腹の中にいたんだね？ 結城さんになぜ言わなかったの？」

これは、柊一が一番疑問に思っていることだった。

「そのときは、まだ妊娠に気がついていなかったのよ。知ってれば、また状況は変わった

かもしれないけど。結城さんがパリに行ってしまったって何の連絡もなくなってしまったからわかったの。住所も知らせてくれないし三ヶ月が過ぎた頃には、私のことは、もう忘れてしまったのだと思うしかなかったわ。お腹も少しづつ大きくなってくるし、どうしていいかわからなかった」

「おじいちゃんやおばあちゃんには相談しなかったの？」

「そうするしかないと思って、おじいちゃんに怒られるのは覚悟で言ったわ。結城さんの子供はどうしても生みたかったから……」

「それでどうなったの」

「おじいちゃんは、『バカもん！ 結婚前になんということをしたんだ』と、怒鳴ってそれきり、丸一日口を利いてくれなかった」

柊一は、若い母が一人で悩み苦しんだと思うと、自分の存在がづらくなってきた。知美は話しつづけた。

「でもね、おばあちゃんがとりなしてくれて『生まれてくる子に罪はないから、なんとか知美の身の振り方を考えてやりましょよ』と、おじいちゃんを説得したの」

柊一は、ほっとため息をついて話の続きを待った。

「それで、知り合いの息子さんだった溝口さんのことが頭に浮かんだのね。彼は、子供の頃から父親に連れられて、家へ時々来ていたの。だから私ともよく、遊んだりおしゃべりしたりして気心は知れていたの」

「へえ、幼馴染だったんだ」

「そう。大きくなってサラリーマンになった頃には、おじいちゃんは私と結婚させたいと思っていらしいの。溝口さんも、映画に行こうとか言ってくれて、私のことをよく誘ってくれていた。でも、結城さんと付き合っていたから、いつもそっけなく断ってばかりだった」

そういういきさつがあったので、祖父は溝口に事情を話して、知美と結婚してくれるように頼んだ、ということだった。

話し終えて知美は、長年の肩の荷を下ろしたというようにほっと大きな息をついた。そして、柊一がどう受けとめたか心配そうに見やっている。柊一は、しばらくうつむいて黙っていた。まだ、頭がぼつとしていたが、ずっとしこりになっていたものが少しづつほぐれてゆくようだった。溝口が、父親らしい感情を持てなかったのも、わかる気がした。しばらくして、顔を上げ母のほうへ向き直ると、かすれた声で言った。

「話してくれてありがとう。本当のことを知って良かった。溝口さんにも感謝しなくてはいけないなだね」

日が傾き始め、流れる空気が肌を刺すように冷たくなってきている。

知美は先ほどから、ずっと前方へ視線を向けたままだ。呼吸が止まったように身じろぎもしないで、目を大きく見開いている。急に柊一の腕をつかみ立ち上がったので心臓がドキッ、ドキッと強く脈打っているのが伝わってきた。

「いったい、どうしたのだろう」

不安になり母の視線を追っていくと、長身の男性がこちらの方へ向かって、ゆっくりと歩いてくるのが見える。白いセーターにベージュのジャケットを羽織った結城だった。

「母さん、あの人……」

「柊一、あの人がそうなのよ、貴方の本当のお父さんは結城さんよ」

結城は二人の前まで来ると、やや緊張気味の笑顔を浮かべて立ち止まった。

「やあ、お久しぶり、知美さん、柊一君」

「と言つと少しおどけるように両手を広げた。

ふたりは、言葉が出てこず、ただ立ち尽くしていた。

「知美さん、手紙をありがとう。元氣そうだね。柊一君のことを知ってびっくりしたよ。

もっと早く知りたかったけれど、ずっと日本にはいなかったから仕方がないかな」

知美の目から、涙がツーツと落ちた。結城も声を詰まらせながら気持ちを伝えようと懸命に話しつつける。

「こんなに立派に育ててくれて……。なんてお礼を言えればいいか。絵を見てきたけれど私と作風が似ているね。去年の美術展で会ってから、柊一君が自分の子供だったら、と空想していたんだ」

パリに行つて以来、どうして一通も手紙をくれなかったのか、知美は訊きたいことや話したいことがいっぱいあるのに何も言えず、泣き笑いのゆがんだ表情でただうんうんと頷いている。

結城は、知美の両手をしっかりと握った。そして、その上へ柊一の手を重ね、二人の手を包んだ。二人の手が同じ脈を打っているように、鼓動がお互いの体に伝わっていった。柊一は何か話そうとしても、喉元で詰まって声にならなかった。しかし、体中の血が全部新しくなって流れ始め、胸の中にまだ固まって残っていたものが、温まって溶けてゆくようだった。そして、三人でいるこの暖かさがずっと続いてくれるといいなと感じていた。「あ、

雪

知美が声を出した。三人の間に、花びらが散るように雪が舞い落ちてきた。冷え込んできたと思ったら、ちらちら降りはじめけたのだ。三人の頭や肩にとまって一瞬の白さを見せては消えてゆく。上気している親子には、雪さえ冷たくはなかった。